

## 学会参加レポート

# 25<sup>th</sup> Biennial Meeting of the International Society for Neurochemistry-13<sup>th</sup> Asian Pacific Society for Neurochemistry joint meeting および 12<sup>th</sup> Biennial ISN Satellite Meeting Myelin Biology 2015 に参加して

山崎 礼二

(東京薬科大学大学院薬学研究科)

2015年8月23日～27日に25<sup>th</sup> Biennial Meeting of the International Society for Neurochemistry-13<sup>th</sup> Asian Pacific Society for Neurochemistry joint meetingがオーストラリアのケアンズにて行われ、それに引き続き2015年8月28日～9月1日に12<sup>th</sup> Biennial ISN Satellite Meeting Myelin Biology 2015が同じくオーストラリアのフィッツロイ島で開催されました。今回、両学会に出席し、参加レポートを執筆する機会をいただきましたので、ここに報告いたします。

ケアンズへは日本から直行便では7時間程度で時差も1時間しかないので体には大きな負担もなく学会を迎えることができました。オーストラリアは冬でしたが、ケアンズは赤道に近いとあって、日中は30℃近くまで気温が上がりました。日本と比べるとからっとしており、夜は涼しいくらいでとても過ごしやすい気候でした。

学会はケアンズコンベンションセンターにて開催されましたが、とても綺麗な建物でした。館内はとても涼しく、Wi-Fiの接続も良かったので快適に過ごせました。あらかじめスマートフォンにアブストラクトのPDFファイルをダウンロードしておいたので見たいセッションは逃さずに見ることができたと思います。また、ランチだけでなくポスターセッションの後にはコーヒープレイクが挟まれており、パンやフルーツが用意されたため学生としては非常にありがたく感じました。学会会場の周りは観光地ということもあり、レストランやお店が多く立ち並んでいたため空き時間に散歩をしながら町並みを楽しむこともできました。

ポスターセッションでは、二日間ポスター発表を行うことができました。今回私はオリゴデンドロサイトが発現するMyosin Superfamilyの役割について発表させて頂きましたが、自身が行っているミエリン研究は多発性硬化症の罹患率の高い欧米諸国では、多くの研究者の関心を集めている研究であることを日本で発表するとき以上に実感しました。その点もあり、ポスターセッションの時間でも自分のポスターを見ている人を見かけたら積極的に声をかけることで多くの研究者とディスカッションを重ね、とても有意義なポスター発表を行うことができました。世界中の研究者とのディスカッションを通して、今後の検討課題や自身の弱点を知ることができ、今後の研究活動に活かしていきたいと思えます。

また、学会中は非常に多くのパーティーが開催されました。学会初日の夜にはstudent/posdocパーティーが行われ、お酒と軽食が振る舞われました。そこでは、多くの若手研究者が楽しく交流しており、

日本人同士でも多くの方々とお話しする機会があり、刺激を受けることができました。

最終日のフェアウェルパーティーはレインフォレストというテーマパークで開催され、コアラやカンガルー、ワニなどの動物を見ながら食事をすることもできました。食事はバイキング形式でどれを食べてもとてもおいしく食べ過ぎてしまうほどでした。

その翌日から行われたサテライトミーティングは、ケアンズの港から船で40分ほど行ったフィッツロイ島にあるリゾートホテルが会場となっていました。この島はグレートバリアリーフの一つでとても綺麗な海を眺めながら浜辺を散歩することができました。さらに驚いたのは浜辺からでも海を覗くと綺麗な色をした魚たちを見ることができたことです。

ミーティングは28日の午後から始まり、一日中セッションが続くためかなりハードなスケジュールでした。オーラルセッションが始まってすぐに感じたことは、これまで論文で一度は見たことがあるような先生ばかりが一同に集結する会だということでした。質疑応答では延々とディスカッションが繰り返されており、圧倒されたことを覚えております。とくに印象に残っているのはStanford大学のMichelle Monje博士のオプトジェネシスを用いて神経活動がオリゴデンドロサイト前駆細胞の増殖や分化、ミエリンのリモデリングを行っていることを証明したプレゼンテーションでした。他のセッションもあまりにハイレベルの内容が多く、驚きの連続だったことを覚えています。

また、ISNの本大会でポスターに来ていただいた研究者も数人はサテライトミーティングにも参加していました。とくにオーストラリアのモナッシュ大学の大学院生とは研究内容の話だけでなく、様々な会話をすることができ、友好を深めることができました。自身はポスター発表をさせて頂きましたが、サテライトミーティングでも非常に多くの研究者とディスカッションすることができ、このような会に出席する機会をいただいて本当に光栄に思いました。そして、今学会を通じて普段はなかなか経験できないこともたくさん経験でき、今後の研究人生に多大な影響を与えてくれたと感じています。

今回日本神経化学会から旅費の援助をしていただくことができ、本当にありがたく思います。特にご尽力いただきました日本神経化学会国際対応委員会にはこの場を借りて深く御礼申し上げます。



Student-Posdoc Partyにて、他のトラベルアワード受賞者と（右から2人目が本人）